

石塚 政行

要旨 Talmy (1991) 以来の長い伝統を持つ移動類型論の鍵となる概念である、《動詞》あるいは節の《主要部》の規定に関する考察は驚くほど少ない。例外と言えるのが Croft et al. (2010) および松本 (2017a) である。本稿では、バスク語の移動表現に基づいて、両者の《動詞》・《主要部》概念を検討する。具体的には、以下の3点を主張する。(i) Croft et al. の定義では、バスク語の動詞の多くは《動詞》と認定できない。(ii) 松本の定義を採用すれば、バスク語の動詞が《主要部》であると問題なく認定できる。(iii) 松本の定義によれば、バスク語の品詞分類では動詞でない語類（行為副詞）も節の《主要部》と見なすことになる。これを通じて、《主要部》や《動詞》という概念を通言語的に適用可能な形で規定することの重要性を示す。

1. 移動類型論の概要

人や物がある地点から離れ別の地点へと位置を変える移動事象の表現法に、どのような普遍性・多様性があるのかを問う移動類型論における最も重要な発見のひとつは、移動の経路が何によって表現されるかに基づいて言語を分類できるということである。Talmy (1991) に端を発するこの観点は、それに続く多くの研究によって修正を受けつつも基本的に踏襲されており、世界の言語の移動表現を考える際に必要不可欠な枠組みのひとつとなっている（こうした移動類型論の概観としては、たとえば Imbert 2012, 松本 2017a を参照）。

この枠組みの鍵となる道具立ては、表現対象である《経路》と、表現形式である《動詞》（および《付随要素》）である。まず経路とは、移動体がたどる道筋を、他の基準物あるいは位置との関係で概念化したものである。たとえば、東京-博多間の「のぞみ」の移動は、「(東京) を出る¹」「(大阪) を通る」「(博多) に入る」などの経路を含むものとして概念化できる。

Talmy (1991, 2000: Ch 3) の提案によれば、こうした経路概念を表現する典型的な形式が動詞であるか付随要素であるかによって、世界の言語は二分される。たとえば、「電車が博多駅に入った」のように、日本語は経路を動詞で表現するが、英語は The train ran **into** the station のように、動詞でない要素で表現する。英語の in, out, up, down のような、主動詞と姉妹関係にあつてそれを修飾する要素を Talmy (1991, 2000) は付随要素 (satellite) と呼ぶ。また、Talmy (2012) では、本来の付随要素と側置詞を合わせたカテゴリーを “satellite” と呼び、主動詞と対立する類型論上のカテゴリーとして設定している。

Matsumoto (2003) が指摘するように、Talmy の《動詞》という用語法は誤解を招くものであり、より正確には主動詞と言うべきである。Talmy が《動詞》と分類するものは、品詞としての動詞ではなく、あくまで文の主要部となっている動詞語根なのである。このことを踏まえて、Matsumoto (2003) や松本曜 (2017a) は、経路を表現するのが文の《主要部》か《非主要部》（主要部外要素）かという分類を提案している。

以上の概観からわかるように、Talmy に始まる移動類型論における《主要部である動詞》という類型論上の概念は、その根本をなす非常に重要なものであるが、Talmy (1991) はこれを明示的に規定していない。Talmy

1 厳密には、「～から出る」は移動の事実およびその経路の両方を表している。「～を通る」「～に入る」も同様である。。

(2005, 2012) には主動詞を認定する基準が音韻・形態・統語・意味といった複数の観点から挙げられているが、このような基準を用いた認定には、通言語的比較をする上での問題がある。次節ではこの問題を指摘し、Croft et al. (2010) の代案を紹介する。

2. Talmy の《主動詞》の問題点

Talmy (2005, 2012) は、ある文における2つの構成素タイプのうち、どちらがより主動詞と呼ぶにふさわしいかを判断する基準として、以下のような観点を提示している（各項目の記号は Talmy 2012 による。f3 および g は説明が煩雑になるのを避けるため省略した）。

- 形態論：(a1) TAM 等によって屈折する (a2) 主語等の人称等によって屈折する
- 統語論：(b1) 一方が他方の構成素に対する主要部となっている (b2) 場所・時間等の不変化詞に対する主要部となっている (b3) 副詞や項名詞句に対する主要部となっている
- 共起パターン：(c) あらゆるパターンの文（または文の構成要素）の必須要素である
- 類のサイズ：(d) 一方が他方より多くの形態素が属する、あるいは開いた類である
- 音韻論：(e1) 属する形態素の平均的な音形が長い (e2) 属する形態素の長さのばらつきが大きい (e3) 属する形態素に含まれる音素の種類が多い
- 意味論：(f1) 具体的で詳細・複雑な意味内容を持っている (f2) 表される意味内容が多様である

Talmy は、これらの観点はどれも単独では主動詞を決定することはできず、言語ごとに有効な観点が異なることを認めた上で、これらの基準をより多く満たす構成素タイプがあるならば、それは他の構成素タイプよりも主動詞らしいと言える主張している。

しかし、一般に、普遍的なカテゴリーをア・プリオリに認めないのならば、何らかのカテゴリー（この場合は主動詞）を言語間で比較する際に Talmy (2012) のようなアプローチを取ることは、以下のような問題を含む（Croft 2001, 2016, Haspelmath 2010, Cristofaro 2009 などを参照）。

第一の問題は、言語ごとに用いられる基準が異なること、部分的に重なりつつも完全には一致しないことである。たとえば、Talmy (2012) は Atsugewi の主動詞語根を認定するには基準 (a, b, c, d, e, f) を用いているのに対し、中国語については (b, c) のみを、Jaminjung については (a, b, c) のみを基準として主動詞を判定している。すると、これらの3つの言語の《主動詞》に共通する性質は (b, c) のみということになる。議論のために、基準 (a, d, e, f) を満たす構成素タイプを持つ言語を仮定しよう。Talmy の手法は、この構成素タイプを《主動詞》と認めて、それとはまったく共通点のない上記3言語の《主動詞》と比較することを原理的には許すものなのである。

第二の潜在的問題は、提示されている基準が通言語的に適用可能な形でないことである。移動類型論においては、これを背景として、各言語に固有の構文に基づいて主動詞を認定し、枠付けパターンを考察するということが（暗黙のうちに）行われてきた。しかし、たとえば、諸言語の動詞を比較することを考えたとき、英語の三人称単数現在形の-sの基準は中国語には適用できないし、バスク語の目的語との一致の基準は英語には適用できない。Talmy (2012) の (a-g) はほぼこの問題を回避してはいるが、それでもたとえば (b) で

用いられている《主要部》に当たるかどうかを判断する通言語的に適用可能な基準は必ずしも自明ではない。

このような問題点を踏まえて、Croft et al. (2010) は、言語にかかわらず適用可能な基準を提案し、それを一貫して用いている。次節では彼らの提案を紹介し、それが移動類型論におけるバスク語の位置づけにどのように影響するかを考察する。

3. Croft et al. の《動詞》とバスク語の動詞

Croft et al. (2010) は彼らの移動（枠付け）類型論における《動詞》を次のように定義している。

[W]e will thus define a morpho-syntactic element as a ‘verb root’ if it can occur as a predicate on its own with the same meaning.

[...] Anything that is not a verb root but encodes an event component will be analyzed as a satellite. (Croft et al. 2010: 206)

たとえば、英語の *into* はそれ自体で述語とならないので《動詞》ではない（*The train **into** the station）。また、スペイン語の現在分詞も、それ自体では述語とならないので《動詞》ではない（[1] の *flotando* を参照）。これは、Talmy (2012) の (b1) の基準を明確化したものと位置づけられる。

(1) a. *La botella entró a la cueva flotando.*

the bottle went.in to the cave floating

‘The bottle floated into the cave.’ (Talmy 2000: 49)

b. **La botella flotando.*

the bottle floating (Croft et al. 2010: 206)

Croft et al. (2010) の類型論をバスク語の移動表現に適用すると、経路は《動詞》と《付随要素》のどちらで表現されるということになるだろうか。先行研究ではバスク語は動詞枠付け言語である、すなわち、バスク語の移動表現では、バスク語で伝統的に動詞²と分類されてきた語類が経路を表現する傾向がある、と主張されてきた (Ibarretxe-Antuñano 2012, 2015 など)。しかしはたして、バスク語の動詞は《動詞》なのだろうか。

バスク語の動詞の多くは定形を持たず、定形節を作るためには助動詞を必要とする。たとえば、*sartu* 「入る」の現在形は (2a) のように分詞 *sartzen* と助動詞 *da* から成る複合的表現である。この助動詞を削除した (2b) は容認されない³。したがって、バスク語の動詞 *sartzen* は Croft et al. の《動詞》ではないことになる。

(2) a. *Ene adiskide-a sar-tzen da bere kadera esku-tan.*

my friend-the go.in-IPFV PRS her chair.the hand-LOC

‘My friend went in with her chair in her hands.’ (A41-1⁴)

b. **Ene adiskide-a sar-tzen bere kadera esku-tan.*

my friend-the go.in-IPFV her chair.the hand-LOC

2 以下、《動詞》が類型論上の概念を表すのに対し、無印の動詞はバスク語における品詞分類を表す。

3 等位節の一方では助動詞を省略することが可能である (Amundarain 2003)。また、等位接続されていなくても、対比の文脈があれば、(勝者に「僕らの勝ちだ」と言われた敗者が) *Bihar guk irabaziko* 「明日は僕らが勝つぞ」と言うような例が可能である。

4 以下、バスク語の例は、A から始まる記号が付されているものは Ishizuka (in preparation) の実験調査で得られた例、それ以外は母語話者1名との聞き取り調査で収集したものである。いずれもラブル = 低ナバラ方言の話者によるデータである。

一方で、バスク語は動詞だけではなく位置名詞や格標識、後置詞、副詞といった動詞以外の要素（広義の付随要素）によっても経路を表現することが指摘されている（Ibarretxe-Antuñano 2015）。たとえば (3a) では後置詞 *goiti* 「上へ」が「上がる」に相当する経路を表現している。さらに、こうした付随要素は、(3b) のように動詞なしで文を成立させることが可能である。すると、これらの付随要素は Croft et al. の枠組みでは《動詞》に分類される。

(3) a. *Eskalerr-etaik goiti jin zaut lasterka.*
stair-PL.ABL up come.PFV PRS.DAT:1SG running

‘He ran up the stairs to me.’ (A25-6)

b. *Ene adiskide-a eskalerr-en goiti lasterka.*

my friend-the stair-PL.GEN up running

‘My friend ran up the stairs.’ (A24-1)

Ibarretxe-Antuñano (2015) は (3b) のような構造の移動表現が口頭の談話と文章の両方に見られることを報告している。Croft et al. の類型論では、バスク語の移動表現はおおむね (2a) のような《付随要素》枠付け構文で表現され、一部に (3b) のような《動詞》枠付け構文が見られる、ということになる。

4. 松本の《主要部》とバスク語の動詞

Talmy の《主動詞》の定義を明示的に批判しているわけではないが、松本 (2017a) も《主要部》(主動詞) の認定基準にはっきり言及している数少ない研究のひとつである。松本は主要部を次のように定義する。

ここで言う主要部は主動詞を指すが、何が主動詞であるかに関しては、1) 定形である（時制接辞、一致接辞などを持つ）、2) 全体の項構造（特に主語）を決める、の二つを基準とする。伝える意味内容が豊かであるとか、焦点が当てられるといった基準は用いない。（松本 2017a: 16）

このうち、1) は通言語的に適用可能かどうか不明瞭であり、松本自身も Matsumoto & Kawachi (2020) においては 2) のみに言及しているのだから、本稿では松本 (2017a) の 2) の定義のみを考察の対象とする。

項構造を決めるとはどういうことだろうか。たとえば日本語の「這う」は二格着点句を取らないが、「這い出る」という複合動詞は「外に這い出る」のように二格を取ることができる。「出る」は単独でも二格を取れるので、「這い出る」が二格を取れることは「出る」が二格を取れることに由来すると考えられる。これが、「這い出る」の項構造を「出る」が決める、ということである（松本 2017b）。「道をたどる～*道を着く～*道をたどり着く」の関係も同様である（ibid.）。

バスク語の動詞はこの意味で《主要部》となるだろうか。(4a) を考えてみよう。(4a) の方格名詞句 *etxera* 「家へ」は着点項を具現化しているが、動詞 *sartu* 「入る」(*sartzen* は不完了分詞形) を削除した (4b) では方格名詞句は容認されない。いっぽう、(4c) の知覚構文の補文 *kanpotik barnerat sartzen* 「外から中へ入る」では、助動詞は存在しないが方格名詞句 *barnerat* 「中へ」が認可されている。これらのことから、(4a) の項構造（方格句の容認可能性）を決めているのは動詞 *sartu* であって、助動詞 *da* ではない。したがって、(4a) の

sartzen は《主要部》であり、この文は経路を《主要部》が表現しているということになる。

- (4) a. *Lagun-a etxe-ra sar-tzen da.*
friend-the house-ALL go.in-IPFV PRS
'The friend went into the house.' (A12-2)
- b. **Lagun-a etxe-ra da.*
friend-the house-ALL PRS
- c. *Kanpo-tik barne-rat sar-tze-n ikus-i dut.*
outside-ABL inside-ALL go.in-GER-LOC see-PFV PRS.ABS:3SG.ERG:1SG
'I saw her go from the outside to the inside.' (A12-6)

5. バスク語の行為副詞

バスク語には「行為副詞」と呼ぶべき副詞の一類があり、軽動詞と結びついて行為を表したり、様態副詞のように動詞を修飾したりする。行為副詞は移動の様態を表すのに最もよく用いられる語類であるため、移動類型論にとって特に重要である。この節ではバスク語の行為副詞の概要を紹介し、行為副詞が松本の《主要部》となる場合があることを示す。

本稿では、①裸位置格-n を伴う動名詞句と同様に、ある種の動詞の補語となる、②動詞を修飾して「～しながら」の意味を表す、という2つの基準を満たす語を行為副詞と呼ぶ。バスク語の動名詞は、動詞の原形に接辞-tze または-te を付加することで得られる。裸位置格-n は、位置格-an の古形であり、動名詞の他には固有名詞のみに付く。動名詞の位置格形と裸位置格形は機能が異なる。たとえば、leitu 「読む」の位置格形 lei-tze-an は「読みながら」という副詞節を構成するが、裸位置格形 lei-tze-n は (5) に挙げるようなさまざまな動詞の補語となる。行為副詞は、動名詞の位置格形と裸位置格形の両者の機能を併せ持つものと言える。

- (5) a. *Ba-daki lei-tze-n eta izkiria-tze-n.*
AFF-PRS.know.ERG:3SG read-GER-LOC and write-GER-LOC
'(S)he can read and write.'
- b. *Beti kasteta lei-tze-n ari da.*
always newspaper read-GER-LOC engage PRS.ABS:3SG
'(S)he is always reading newspapers.'
- c. *Liburu-a-ren lei-tze-n has-i da.*
book-the-GEN read-GER-LOC start-PFV PRS.ABS:3SG
'(S)he started reading the book.'
- d. *Liburu-a-ren lei-tze-n ikus-i dut.*
book-the-GEN read-GER-LOC see-PFV PRS.ABS:3SG.ERG:1SG
'I saw {her/him} reading the book.'

代表的な行為副詞として *lasterka* 「走って」の例を (6) に挙げる。(6a-d) は (5a-d) の動名詞裸位置格形

に対応する機能を果たしている例である。(6e) は動詞 sartu「入る」を修飾している例である。形態論的には, *lasterka* は名詞語基 *laster*「急ぎ」に接辞-*ka* が付いたものである。このタイプには他に *eztulka*「咳をして」, *hazka*「掻いて」, *harrika*「石を投げて」などがある(詳しくは de Rijk 2008: 912ff. を参照)。また, 名詞と位置格標識-*an* からなるもの (*lanean*「働いて」, *dantzan*「踊って」, *pilotan*「ペロタをして」など), 名詞と具格標識-*z* からなるもの (*kantuz*「歌って」, *irriz*「笑って」, *oihuz*「叫んで」) などがある。これらの行為概念は, 多くの言語で非能格動詞によって表現されるが, バスク語では基本的に軽動詞 *ari* (例 6b を参照) と行為副詞 (または軽動詞 *egin* と行為名詞⁵) によって複合的に表現される。

- (6) a. *Ongi daki *lasterka*.*
 well PRS.know.ERG:3SG running
 ‘(S)he can run well.’
- b. *Lasterka ari *da*.* c. *Lasterka has-i *da*.*
 running engage PRS.ABS:3SG running start-PFV PRS.ABS:3SG
 ‘(S)he is running.’ ‘(S)he started running.’
- d. *Lasterka ikus-i *dut*.* e. *Barne-an sar-tu *da* *lasterka*.*
 running see-PFV PRS.ABS:3SG.ERG:1SG inside-LOC go.in-PFV PRS.ABS:3SG running
 ‘I saw {her/him} running.’ ‘He went in, running.’ (A14-9)

さて, 行為副詞は松本の《主要部》になりうるだろうか。たとえば (7a) を考えてみよう。この例の奪格名詞句 *bidetik*「道を」は中間経路項を具現化している。ここから行為副詞 *lasterka*「走って」を削除した (7b) は容認されないため, 軽動詞 *ari* は奪格名詞句を取らないことがわかる。いっぽう, (7d) の知覚構文の補文 *bidetik lasterka*「道を走る」では, *ari* は存在しないが奪格名詞句が認可されている。また, 松本は特に主語を重視しているが, (7a) 主語名詞句 *laguna* は, (7c) のように *ari* だけでは認可されない。それに対して, (7d) の知覚構文の補文には, *ikusi*「見る」の目的語と同一指示として解釈される非頭在的主語項があるが, それは *lasterka* のみによって認可されている。したがって, 行為副詞 *lasterka* は項構造を決めており, (7a) における *lasterka* は《主要部》と認定される。

- (7) a. *Lagun-a bide-tik *lasterka ari* *da*.*
 friend-the road-ABL running engage PRS
 ‘The friend is running on the road.’
- b. **Lagun-a bide-tik *ari* *da*.*
 friend-the road-ABL engage PRS
- c. **Lagun-a ari *da*.*
 friend-the engage PRS

5 たとえば「走る」は行為名詞 *laster* と軽動詞 *egin*「する」によって *laster egin* と表現することもできる。この構文では *laster* は *egin* の目的語となっている。バスク語の語彙に非能格動詞が少ないことについては, Levin 1989, Levin & Rappaport Hovav 1995 など, 行為名詞と *egin* からなる複合的述語については de Rijk (2008: 298ff.), 副詞と *ari* からなる複合的述語については de Rijk (2008: 385ff.) を参照。

d. *Lagun-a bide-tik lasterka ikus-i dut.*

friend-the road-ABL running see-PFV PRS.ABS:3SG.ERG:1SG

‘I saw the friend running on the road.’

6. まとめ

Croft et al. (2010) と松本 (2017a) の定義をバスク語に適用した以上の考察からわかることは、これらの定義はいずれも、個別言語で伝統的に動詞と分類されてきた語類でないものを《主動詞》として認定する可能性があるということである。このこと自体は、類型論的な一貫性・比較可能性を担保するという目的に照らせばまったく問題ではない。しかし、これまでの移動類型論は、必ずしも通言語的に適用可能な概念としての《主動詞》を定義して、それを体系的に用いてきたわけではなく、個別言語ごとの基準に依る部分も大きかった。諸言語に特徴的な枠付けのタイプは、移動動詞語彙のパターンや様態の表現頻度といった他の現象と相関していることが指摘されてきたが、その相関の背後にある原理を探求するためには、実際に比較されているのが何なのか、それらは比較可能なのかをより明確にしていく必要があるだろう。

略号一覧 1: 一人称, 3: 三人称, ABL: 奪格, ABS: 絶対格, AFF: 肯定助詞, ALL: 方格, DAT: 与格, ERG: 能格, GEN: 属格, GER: 動名詞, IPFV: 不完了分詞, LOC: 位置格, PFV: 完了分詞, PL: 複数, PRS: 現在, SG: 単数

参考文献 Amundarain, I. (2003) Coordination. In: J. I. Hualde & J. Ortiz de Urbina (eds.) *A grammar of Basque*, 844–892. Berlin: Mouton de Gruyter. / Cristofaro, S. (2009) Grammatical categories and relations: Universality vs. language-specificity and construction-specificity. *Language and Linguistic Compass* 3(1): 441–479. / Croft, W. (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: OUP. / Croft, W. (2016) Comparative concepts and language-specific categories: Theory and practice. *Linguistic Typology* 20(2): 377–393. / Croft, W. et al. (2010) Revising Talmy’s typological classification of complex event constructions. In: H. C. Boas (ed.) *Contrastive studies in construction grammar*, 201–235. Amsterdam: John Benjamins. / de Rijk, R. P. G. (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press. / Haspelmath, M. (2010) Comparative concepts and descriptive categories in crosslinguistic studies. *Language* 86(3): 663–687. / Ibarretxe-Antuñano, I. (2012) Placement and removal events in Basque and Spanish. In: A. Kopecka & B. Narashimhan (eds.) *Events of putting and taking: A crosslinguistic perspective*, 123–144. Amsterdam: John Benjamins. / Ibarretxe-Antuñano, I. (2015) Going beyond motion events typology: The case of Basque as a verb-framed language. *Folia Linguistica* 49(2): 307–352. / Imbert, C. (2012) Path: Ways typology has walked through it. *Language and Linguistic Compass* 6(4): 236–258. / Ishizuka, M. (in prep.) Motion Event Descriptions in Navarro-Labourdin Basque. / Levin, B. (1989) The Basque verbal inventory and configurationality. In: L. Marácz & P. Muysken (eds.) *Configurationality: The typology of asymmetries*, 39–62. Dordrecht: Foris. / Levin, B. & M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax–lexical semantics interface*. Cambridge, MA: The MIT Press. / Matsumoto, Y. (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: S. Chiba et al. (eds.) *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*, 403–418. Tokyo: Kaitakusha. / 松本曜 (2017a) 「移動表現の類型に関する課題」松本曜 (編) 1–24. / 松本曜 (2017b) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜 (編) 247–273. / 松本曜 (編) (2017) 『移動表現の類型論』くろしお出版. / Matsumoto, Y. & K. Kawachi (2020) Motion event descriptions in broader perspective. In: Y. Matsumoto & K. Kawachi (eds.) *Broader perspectives on motion event descriptions*, 1–22. Amsterdam: John Benjamins. / Talmy, L. (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *BLS* 17: 480–519. / Talmy, L. (2000) *Toward a cognitive semantics, vol.2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: The MIT Press. / Talmy, L. (2005) Interview: A windowing onto conceptual structure and language. Part 1: Lexicalization and typology. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3: 325–347. / Talmy, L. (2012) Main verb properties. *International Journal of Cognitive Linguistics* 3: 1–23. 謝辞 本稿のデータを得るために Arantxa Oxandabaratz 氏にご協力いただきました。本研究は JSPS 科研費 JP20259208, JP19129755 の助成を受けたものです。